道徳学習指導案

●●●●立●●中学校　●●　●●

１　日　時　　平成●●年●●月●●日（●）●～●校時　●●時●●分～●●時●●分（２時間）
２　学　級　　３年●組　男子●●名　女子●●名　計●●名
３　場　所　　３年●組教室
４　主題名　　「勤労」　＜C⑬＞
　　関連＜A(1)＞　＜A(3)＞　＜B(6)＞　＜C⑩＞　＜C⑫＞　＜C⑭＞
５　資料名　　「一志の弁当」　自作資料
６　主題設定の理由

(1)教材観

勤労は人間生活と社会を成立させる基本的な要件である。一人一人がその尊さや意義を理解し，公共の福祉と社会生活の発展・向上に貢献することが求められている。ここでは「勤労の意義」を次のように考える。

①勤労の対価として受け取った収入によって，個人や家庭の生活を維持する。
②勤労によって個人の夢や幸福を追求する。
③社会的分業によって社会全体を支える。

また，③は「勤労の尊さ」に深く関わっており，生徒が「尊さ」を実感するのは，「奉仕の精神をもって，人々の幸福と社会全体の発展に貢献する生き方」に接した時である。

戦後日本の発展は，多くの国民の勤労の上に実現された。海外からは「働き蜂」「エコノミックアニマル」と揶揄されながらも，勤勉な国民性が高度経済成長を支えたのは事実である。資源の少ない我が国にとって，豊かな社会性を持つ勤勉な国民こそが財産である。そして，この国民性を培ったのは我が国の教育であり，家庭や学校で，その伝統を継承していく必要がある。

しかし，近年の若者の状況を考えた時，将来を危惧する実態も少なくない。早期離職，フリーター，ニート，引きこもり等の問題は，耐性・協調性・責任感・コミュニケーション能力等の欠如も原因の一つではないかと考えられる。社会連帯の精神を高め，「勤労と奉仕」の重要性を自覚することは，日本人気質の大切さに気付く学習であり，21 世紀を生きる私たちにとっても欠くべからざる道徳的価値であると考える。

「勤労と社会貢献」の意義や尊さについて考える学習は，ともすれば「自己犠牲」の押しつけと捉えられる場合がある。そこで，多くの人々の善意や支えにより日々の生活が成り立ち，現在の自分があることを生徒が振り返り，感謝の思いを深めることがまず重要である。他者から受けた愛情（思いやりの心）を深く感じることによって，「自分も他者の役に立ちたい。役割や責任を果たしたい。恩返ししたい。」という思いが自然に込み上げてくる。人は互いに助け合い，協力し合って生きている。その人と人との絆が社会全体を支えていることは言うまでもない。その絆の一つが「勤労」であり「奉仕」である。抽象的な言葉より，人と人とのつながりとして身近な言葉で表現する方が，より実感をともなった理解に近い可能性があることにも配慮したい。そして，生徒が「勤労」について考える際は，収入や自己の目標達成という自己利益から，他者利益，社会全体の利益というように，より高次の視点で捉えられるようにすることが重要である。

このように，多くの関連項目を持つ「勤労」に関する学習では，生徒が互いに知識を補い，考えを深め，多くの道徳的価値を統合して考えを巡らせる必要がある。

『指導内容を構成する際のよりどころは，基本的には 24 の項目であるが，必ずしも各項目を一つずつ主題として設定しなければならないというのではない。内容項目を熟知した上で，各学校の実状，特に生徒の実態に即して，生徒の人間的な成長をどのように図り，どのように道徳性を育成するかという観点から，幾つかの内容を関連付けて指導することが考えられる』（中学校学習指導要領解説道徳編 38 ページ）とある。今回の学習では「勤労」という主題を明確にした上で，関連性を踏まえた配慮と工夫を行っていきたい。

⑵ 生徒観

生徒は「職場体験学習」を通して，社会で働くことの喜びや厳しさを体験的に学んだ。しかし，普段の掃除や係活動では，心を込めて取り組めなかったり，困難なことから逃げようとすることがある。その要因には，「人の役に立つ喜び」を十分に体得できていないことがあげられる。また，「自分がやらなくても誰かがやるだろう」という他人任せの意識もあると考える。

次に，この学年の基礎基本調査「生活に関する調査」の「社会性」に関わる結果を示す。

各質問に対して，「よくあてはまる」と回答した生徒の割合は次の通りである。

28「地域や子ども会などの行事に参加しています。」…… 46.4%（県 17.8%）
29「自分の住んでいる地域のことが好きです。」…… 64.3%（県 36.4%）
30「学校や社会のルールーを守っています。」…… 57.1%（県 44.6%）
31「近所の人や家の人にあいさつをしています。」…… 85.7%（県 59.5%）

これらの項目では概ね高い数値を示していることが分かる。次に，「自己肯定感」に関わる結果を示す。

36「将来の夢や目標をもっています。」…… 42.9%（県 53.9%）
37「将来の夢や目標は，かなうと思います。」…… 17.9%（県 27.6%）
39「自分の良さは，まわりの人に認められていると思います。」・ 17.9%（県 27.6%）
40「努力をすれば，自分もたいていのことはできると思います。」32.1%（県 38.8%）

この結果は，本校の生徒が協調性を持ち，社会生活に適応しながらも，「困難な状況の中でも，自己の力を信じて最後までやり抜こうとする強い意志」を十分に育てることができていないことを示している。高校進学後や就職後，自分で課題を解決しなければならない環境の中で，逞しく生き抜く力を培うことが不十分であった。

あらゆる機会を捉えて生徒の自己肯定感を高め，将来に対する展望を描き，人や社会のために積極的に挑戦していこうとする実践意欲と態度を育てることが本校の課題であると考える。

⑶ 指導観

一つのテーマに対して，全員が自己の思いを出し合い，活発に討論される授業が理想である。しかし，時間的な制約や発言意欲の個人差もあり，一部の意見を中心にして授業が展開されることがあった。そこで，今回は知識構成型ジグソー法を取り入れ，生徒全員の言語活動を充実させる。討議を通して，一人ひとりが自己の課題として主体的に，勤労の意義やその尊さを考えられるようにする。

導入では，若年離職率の高さを危惧した七五三問題から，「仕事を続けていくために大切なもの」とは何かを課題として提示する。

エキスパート活動では３つのグループに分かれ，資料を通して学ぶ。資料のねらいは次の通りである。

Ａ：勤労や奉仕を通して私たちは社会に貢献しているという自覚を高める。
Ｂ：困難を克服して初めて満足感・達成感が得られることを想起し，着実にやり抜く強い意志の大切さを確認する。
Ｃ：充実した生き方を追求し実現していくことが，一人一人の真の幸福につながること。そのためには，互いに助け合い，協力し合う関係が重要であることを理解する。

ジグソー活動では，３つのエキスパート活動で学習した内容を交流し，「仕事を続けていくために大切なもの」に迫っていく。最終的に各ジグソーグループから発表される「大切なもの」は異なると予想される。しかし，話し合いの過程で取り上げられるテーマには多くの共通点があり，その一つ一つが「勤労の意義や尊さ」の自覚を高めてくれるであろうと考える。

指導者が想定している話し合いのポイントは次の通りである。

① 困難な状況におかれながらも課題を克服し，乗り越えた体験を振り返って，自信や展望を持つ。
② 困難から逃げない生き方を通して初めて，人と共に生きる喜びが得られることを理解する。
③ 一つ一つの職業と勤労が，社会に貢献していることを自覚する。
④ 他者の幸福が，自己の喜びとして体感される生き方に共感する。

⑤ これまでの生活体験から，人は互いに助け合い，協力し合って生きていることを再確認する。
⑥ 身近な大人が，家族や社会に役立つことを願って働かれていることに対して感謝の思いを深める。
今回の学習によって，このような意見交流がおこなわれることを想定している。
エキスパートグループからの説明後，具体的には次のような話し合いを期待する。

「僕たちの班は，一番大切なものを何にする？」
「仕事でも何でも辛抱はつきものよ。我慢。我慢。」
「でも，仕事って何十年もするでしょ。ずっと我慢じゃ辛いよ。」
「そうそう，何か楽しみもないとね。職場の雰囲気が明るいとか。時々旅行をするとか。」
「まあ，収入が多ければある程度我慢できるかな。若いうちはそんなに望めんかな～。」
「職場の雰囲気や収入も大切だけど，仕事自体が楽しいといいね。一志みたいに仕事が好きになれたらいいな。」
「そうそう。ついた仕事を好きになる事は大切だよ。『いい仕事してますね』って言われる人はきっとそう。」
「学校もそうだよ。自分の学校や部活が好きになって，誇りを持てたら，けっこう充実感あるもん。」
「そりゃ，それが一番だろうけど。なかなかそうはならないよ。」
「そうそう。やっぱ我慢。我慢。」
「でも，自分がした仕事でお客さんが笑顔になってくれたら嬉しいじゃん。」
「自分の仕事ってまんざらでもないっていうか・・・。一志もそこを誇りに感じたんだよ。」
「まあね。そこまでの域に達したらね。でも，それに何年かかるかな？」
「部活だって，最初は大変だったけど，慣れたらけっこうへっちゃらになるじゃん。そんなもんよ。」
「それに，友だちと話したら安心したり，先輩が優しく教えてくれたりとかさ～。」
「いろいろあるけど，頑張っていれば，だんだん良い事もあるってこと？　友だちや仲間もできて。」
「そうそう。簡単にやめたら家にひきこもる人もいるもんね。親が金持ちならいいけど。」
「そんな甘くないでしょ。とにかく俺ん家は無理よ。お前はどうなん？」
「俺ん家も無理に決まっとるじゃん。あ～引きこもりにはなりたくないな～。」
「最初は辛抱。そしたらだんだん慣れてきて，仕事が好きになったり，仲間ができたりするってことか？」
「それに，家族を守る親っていうのもいいじゃん。頼りにされてる感がかっこいい。」
「そりゃ確かに親が仕事して，育ててくれてるのはありがたいと思うよ。言えんけど。」
「仕事っていろいろあるね～。ほんでもってうちの班は何を一番大切にする？」
「どれも大切なんだよな～。でも，やっぱり・・・・」

必ずしもこのような会話になるとは限らないし，生徒それぞれの表現の仕方や選択する言語は異なる。また，一人ひとりが自己の体験を振り返れば，全く異なる内容となるかもしれない。しかし，エキスパート資料から読み取った内容を話し合う中で，このようなテーマが浮かび上がってくる可能性も十分にあると考える。

このような学習形態を活用して，本校の生徒の課題の克服に取り組む。

自分自身がやり遂げた過去の体験等を振り返って自己肯定感を高め，仕事に対する展望を描き，まわりの人や社会のために貢献していこうとする意欲と態度を育てたい。

⑷ 道徳と協調学習

平成27年7月中学校学習指導要領解説「特別の教科 道徳編」２ページ「第１章 解説」「１ 改訂の経緯」を見ると，「いじめの問題への対応の充実や発達の段階をより一層踏まえた体系的なものとする観点からの内容の改善，問題解決的な学習を取り入れるなどの指導方法の工夫を図ることなどを示したものである。・・・『多様な価値観の，時に対立がある場合を含めて，誠実にそれらの価値に向き合い，道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育で養うべき基本的資質である』との答申を踏まえ，発達の

段階に応じ，答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の生徒が自分自身の問題と捉え，向き合う『考える道徳』,『議論する道徳』へと転換を図るものである。」とある。この強いメーセージを踏まえた上で，協調学習は「特別の教科である道徳」においても有効な教育手法になり得ると考えた。

「生き方」を考える道徳は，生徒が主体的に思考し，自ら道徳的価値に迫る学習が重視されてきた。私も，生徒が自ら価値に気付く授業をめざしてきたつもりである。しかし，現実には「道徳の時間はつまらない」「学ぶ楽しさや意義が感じられない」と，生徒からは酷評されてきた。なかなか成果が得られない中で，道徳の教材研究を負担に感ずることも少なくない。発問を工夫したり，実生活との関わりなども取り上げたが，道徳的な課題に対する問題意識を持たせることができず，多様な立場や考えを基にして思考を深めることも不十分なままであった。その結果，学ぶ意欲が持続せず，生徒からは「つまらない」との評価を受けてきたのである。また，発言が一部の生徒に偏っていたり，教師がねらう道徳的価値になかなか迫ることができず，結局最後は，「教師による価値の押しつけ」や「意味不明な授業」と捉えられることもあった。

先生方の中には，卓越した指導技術を持ち，道徳的価値に迫る素晴らしい実践を行われている方もおられる。しかし，その教育技術を真似ることは容易でなく，自己の無力さを痛感することもしばしばであった。また，「この学習プログラムを受ければ誰でも立派な道徳の時間の指導者になれる」といった普遍性の高い教員研修を求めてきたが，それにも出会えていない。結果，「道徳の時間がうまくいかない。負担だ。」と嘆き，「道徳はつまらない」と生徒がつぶやく状況に変化はなかった。このような，道徳の時間に関する自身の取組の実態と原因の分析から，協調学習が，「道徳の時間」を変えていく手だての一つになり得るのではないかと考えた。

人が物事を正しく判断するためには，幅広い正確な知識が必要である。環境・人権・平和・道徳について考える際も同様で，「正しい判断」をくだすためには「正しい知識」が必要であることを疑う余地はない。そして，課題解決のヒントとなる有用な知識を自分たちで補充，深化，統合する過程が生徒にとっての真の学びとなる。様々な判断材料を組み立てて自分たちなりの解を生み出す。そうして生み出したものが望ましい判断に到達していると実感する。そうした体験を味わうことができる「道徳の時間」が私の実践には必要である。

一人ひとりの生徒に「つまづき，こだわり，分かり方」の違いがあり，それを共有することによって，思考がさらに深まることも予想される。そのような授業展開を通して，道徳的な心情，判断力，実践意欲と態度を養い，より高次な視点で「生き方」を考えることが可能となる。

また，協調学習を進める組織にも特徴がある。実践を共有し，教師がねらいとする目標や価値にどれだけ迫ることができたかを評価し，教材の吟味と改善を進めている。多くの実践者の手によって，より優れたプランに進化させることをめざしている。このような共同的教材開発を通して，学ぶ楽しさや意義を感じながら，学問的にも倫理的にも学習するに値する内容を，自ら発見する授業づくりが実現できるのではないかと考える。私一人の力ではなかなか成果を生み出すことはできなかったが，共同研究者に支えられて，少しずつでも自身の授業をレベルアップしていきたい。

以上のような考察に基づき，今回の授業では『道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深め，道徳的実践力を育成する』という道徳の時間の目標を達成する手だての一つとして，協調学習による授業実践に取り組むことにした。

7　本時のねらい

「勤労」を通して，人は互いに助け合い，協力し合っていることを理解し，自らも勤労を通して社会に貢献していこうとする意欲を育てる。

8　準備物

ワークシート６種，エキスパート資料３種，ＣＤプレーヤー

９　本時の展開

	学習活動	◎中心発問　　○発問　　・予想される反応	指導上の留意点
導入	⑴活動目標の提示と今日の授業の道筋を示す。 ⑵課題の把握と，課題に対する自分の考えの確認。	○今日は，「協調学習」の道徳をします。しっかり話しあいましょう。 ○導入発問 「保護者の仕事の内容を説明できますか」 「保護者がどんな思いで仕事をされているか知っていますか」 ◎発問１「仕事を続けていくために大切なもの」とはなんでしょうか。 ・安定した高い収入を得ること。 ・職場の人と上手につきあうこと。 ・忍耐力や体力，健康。 ・仕事内容等をよく調べてから仕事に就くこと。 ・自分に合った仕事に就くこと。 ○発問１について，発表の機会をもうけ，簡単に意見を確認する。	○活動目標にとどめる。 ○楽しい雰囲気をつくる。 ○「大人がどんな思いで仕事をしているかを想像してみよう」とする意識を持たせる。 ○１ページ配布。 ○理由を自由に発表させる。あまり深く追及しない。 （時間的な制約がある場合は省略する）
展開	⑶資料の第１部を読み，一志の置かれた状況を把握する。 ⑷エキスパート活動 資料から読み取ったことを話し合い，自分の言葉で説明できるようになる。	○発問２　あなたが一志ならどうしますか。 ア　自分には向いてないと分かった時点でやめる。 イ　一志と同じように，上司のアドバイスを聞き，もう少しこの仕事を続ける。 ウ　覚悟を決め，自分の一生の仕事にする気で頑張ってみる。 Ａ：勤労や奉仕を通して社会に貢献しているという自覚を高める。 ⑴『仕事の喜び』とは何だと思いますか。 ・働いて収入を得ること。 ・他の人に喜んでもらうこと。 ・職場仲間と一つになって達成感を得ること。 Ｂ：困難を克服して初めて満足感・達成感が得られることを想起し，着実にやり抜く強い意志の大切さを理解する。 ⑴一志が，仕事を続けてきて良かったと思えた理由は何だと思いますか。 ・だんだん仕事に慣れて，自信を持てた。 ・仕事を通して，体力や忍耐力を身につけた。 ・仕事の大切さが身にしみて分かった。 ・やめていたら引きこもっていたかもしれない…。	○２ページ配布。 ○教師が朗読する。 ○ワークシートに記入した後，挙手して意思表示させる。 ○各資料に基づいて「仕事を続けていくために大切なもの」を考え，キーワードを使って説明できるようにする。

		C：充実した生き方を追求し実現していくことが，一人一人の真の幸福につながること。そのためには，互いに助け合い，協力し合う関係が重要であることを理解する。 ⑴一志が仕事を好きになり，誇りを感じるようになったのはなぜだと思いますか。 ・できる事が増え，自分なりの工夫も考えられるようになった。 ・自分の努力が成果としてあらわれてきた。 ・自分が役立っているという実感を持てた。 ・周りの人が支えてくれていることを実感した。	
	⑸ジグソー活動 各資料から学んだことを班員と交流し，課題に対する考えをまとめる。	◎発問「仕事を続けていくために大切なもの」を話し合う中で，今日のねらいにせまる。 ○多くの大切なものがあるが，一番大切だと皆が考えるものを選んでみよう。 ○一番に選んだ理由を説明しよう。 ○なぜ，二番目，三番目のものより大切だと考えたのだろうか。	○６ページ配布。 ○班の意見をホワイトボードに記入する。 ○多くの価値に気付くと同時に，敢えて順位をつけることで，勤労に対する理解を深める。
	⑹クロストーク活動 各班の意見を全体で交流する。	◎発問「仕事を続けていくために大切なもの」について，各班でどのような意見交流があったのかを発表する。共通点や相違点，選んだ理由を聞いて，課題に対する理解を深める。 ○一番にあげた項目のキーワードはどんな話し合いと，思いから生まれてきたのか。 ○１班が一番にあげた項目は，他の班ではどのように話し合われたのだろうか。 ○一番にあげた項目どうしには関連があるのだろうか。また，どんな関連があるのか。	○補助発問等によって，表面的な順位付けの理由より，そこに至った話し合いの過程をクローズアップさせる。 ○他の班の意見に対する疑問があれば，積極的に質問し討議させる。
終末	⑺「彩り」の鑑賞	○歌詞を見ながら「彩り」を鑑賞して，今日の課題に対する考えを深める。	○７ページ配布。 ○共感的に捉えてほしい歌詞にアンダーラインを引いておく。
	⑻感想文と授業評価の記入	○発問「仕事を続けていくために大切なもの」について，各自の意見を再度記入させる。 ○本時に指導者が考えてほしかった道徳的価値を記入しておく。一つの考え方や生き方として教師の思いや願いを受け止めさせる。それに対する批判的な見方も許容し，自由に感想を書かせる。	○８ページ配布。 ○協調学習の評価も記入。 ○９ページ配布。 ○「価値の押しつけ」や「意味不明な授業」と捉えられない終末にする。 ○９ページ回収。

10　主発問「仕事を続けるために大切なもの」に対して想定している回答

⑴　内的なもの

○辛抱すること。我慢すること。
○仕事を通した，夢や希望を持つこと。
○仕事を好きになること。
○仕事を楽しむこと。
○自分の仕事に誇り（プライド）を持つこと。
○向上心を持ち努力すること。
○仕事に対する誠実さや責任感を持つこと。
○プロ意識を持つこと。
○チャレンジ精神（主体性・積極性）を持つこと。

⑵　外的なもの

○信頼できる仲間がいること。
○職場の雰囲気が明るいこと。
○職場の仲間に団結力があること。
○頼れる先輩がいること。
○社長などのリーダーがしっかりしていること。
○給料が良いこと。
○休みが多くとれること。

⑶　内的なものと外的なものが複合したもの

○仕事を通して人は互いに支え合っているという自覚を持つ。人とのつながりを大切にする。（社会連帯）
○仕事をする中で，「人に喜んでもらえること」「人の笑顔」を，自分の幸せに感じること。（勤労の喜びと尊さ）
○自分が人の役に立っているという実感を持つこと。生き甲斐に感じること。（自己有用感）
○「世の中の役に立ちたい」という気持ちを持つこと。（公共の福祉）
○向上心を持ち，努力して，その成果をチームで実感すること。（共同的な取組と成功体験）
○自分がこれまでにしてきてもらったことに感謝し，恩返しする。（感謝）

11　板書計画

テーマ「仕事を続けていくために大切なもの」とは

質問1
①
②
③

質問2
ア　○○人
イ　○○人
ウ　○○人

1班	2班	3班	4班	5班	6班
①	①	①	①	①	①
……	……	……	……	……	……
②	②	②	②	②	②
……	……	……	……	……	……
③	③	③	③	③	③

12　読み物資料全文

『一志（かずし）の弁当』

「ピピッ，ピピッ，ピピッ。」　一志の一日はこの目覚まし時計の音から始まる。午前６時，それは一志が毎朝，起床する時刻だ。それから急いで支度し出勤する。会社に着くと，すぐに白衣に着替え，消毒して仕事場に入る。一志の会社では，コンビニエンスストアーやスーパーマーケット向けの弁当を作っている。県内を中心に多くの町へ弁当を届ける。衛生管理の行き届いた工場は，１年３６５日２４時間，休むことなく働き続けている。この工場だけでパートを含めて従業員は約３００人。それぞれ一人一人の担当があり，会社というチームでたくさんの弁当を作っていくのだ。一見，機械化されたオートメーション工場のようだが，実際には一つ一つ手作りの食品が弁当につめられていく。外国製の冷凍食品などは一つもない。ある意味，家庭料理よりも「手作り」なのである。

この春，入社したばかりの一志の担当は，弁当の中にポテトサラダなどの惣菜（そうざい）をつめる作業である。何千という数の弁当を作るため，台の上を作りかけの弁当が次々と運ばれてくる。一志はプラスチック容器の決められた場所に，決められた分量だけポテトサラダをのせていく。上司からの指示に従って，作業内容を変えたり，他のラインを手伝ったりしながら，同じような作業を繰り返していく。作業チームの一員として自分に与えられた役割を果たさなければ仕事にはならない。このような作業を，立ったまま，毎日，毎日繰り返す。それが，現在の一志の仕事である。

一志はこの春，地元の高校を卒業した。一志の「夢」は調理師になって自分の店を持つことであった。しかし，長引く不景気でどこの料理店も調理師見習いなど雇ってくれるところはなかった。だからといって調理師の専門学校に通うほどの金銭的な余裕もない。一志は「調理の仕事がしたい」という一心で，この弁当会社に就職したのであった。

しかし，弁当を作る会社であっても，一志に与えられた今の仕事は，調理ではなかったのだ。仕事を始めて１ヶ月もしないうちにこの仕事が嫌になった。やりたかった調理はできないし，毎日が同じ作業の繰り返し…。一志は誰かに相談したくて，同級生のＦに電話した。Ｆはこの春，夢だった自動車のゴム製品をつくる会社に就職していた。だが，Ｆから返ってきた言葉は意外なものだった。彼も「単純作業の繰り返し」や「夢と現実とのギャップ」に不満を口にしたのだ。一志は今の会社に勤め続けるかどうか，真剣に悩みはじめた。

一志は体調不良を理由に休むことも増えていった。そんなある日，上司のＡさんに呼び出された。

「何か，悩んでいることがあるのなら相談してほしい。」

Ａさんのその言葉に，一志は，これまでの自分の夢，そして今の仕事への不満などを話した。

「もう，この仕事をやめたいんです…」

Ａさんはその言葉に驚く様子もなく，一志を諭（さと）した。

「今の仕事も好きだけど，自分にとってもっと魅力的な仕事がみつかったという事なら応援しよう。しかし，今の仕事が嫌でやめるのだったらもう一度よく考えた方がいい。１年は続けてみたまえ。」

「１年間」，それは一志にとって気の遠くなるような月日である。一志は，次の仕事が見つかるまでと思いながら，もう少し続けることにした。

【質問２】

あなたが一志ならどうしますか。

ア　自分には向いていない仕事だと分かった時点でやめる。

イ　一志と同じように，上司のアドバイスを聞き，もう少しこの仕事を続ける。

ウ　覚悟を決め，自分の一生の仕事にする気で頑張ってみる。

【A】月日は過ぎ，やがて１２月になった。仕事を覚えるために，これまでいくつかの部署も経験させてもらった。そして，年の瀬も迫り，一志にとって初めての忘年会でのことである。

「今年も１年間，１件の食中毒も出さないでやってくることができました。合成着色料や保存料はできるだけ使用せず，『おいしくて安心して食べられる手作り弁当』という評判も頂きました。注文してくださるお客さんも少しずつ増え，売り上げも伸びています。皆さんがお弁当一つ一つに心をこめて，そして衛生面にもしっかり気をつけてがんばってくれたおかげです。本当に感謝しています。お客さんと従業員の笑顔を見るのが大好きな私にとって，素晴らしい１年でした。」

社長の言葉と従業員の笑顔，その一人一人の顔は満足感に満ちている。「お客様と地域，社員と家族，みんなが幸せに。」という思いが，職場を一つにしていることも分かった。そして上司のＡさんは話してくれた。

「苦労もあるけど，いろんな町で，うちの会社の弁当を見つけると嬉しくなるんだよ。」

一志は，「仕事の喜び」とは何であるかが少し分かったような気がした。そして，お弁当を食べているお客さんの笑顔を思い浮かべながら，もう１年，この職場でがんばってみようと思った。

【B】２年目に入り後輩が入社してきた。新鮮な思いで仕事を始めた新入社員だったが，中には３カ月もしないうちにやめてしまう人もいた。一志にはその気持ちがよく分かった。ある日，後輩の一人が話しかけてきた。

「先輩はなんでこの仕事についたのですか。やめたくなった事はありませんか。」

その問いに答えようとして，一志はこの１年間を振り返った。そして後輩を励ますために，自分を勇気づけるために，正直な気持ちを話してみた。

「本当は調理師になるのが夢だったんだ。でもそれは難しくて，この会社にお世話になることにしたんだよ。正直に言うと，やめたくなった事もある。でも，次のあてもないのにこの会社をやめてしまえば，ずっと仕事から逃げ続けてしまう気がして…。もう少し…，もう少し…，と思って頑張ってきた。今は，それで良かったと思っている。仕事の大切さも少しだけど分かった気がするんだ。」

後輩は，一志の目をじっと見て，「そうですか」とだけつぶやいた。

月日が過ぎて，一志が弁当会社に就職して３年目を迎えた。立ったままの作業に弱音（よわね）をはいたこともあった。だが，よく考えてみると，自分の夢だった調理師も立ち仕事である。何時間も立ち続けている仕事はいくらでもある。同じことの繰り返しに思えた作業も，それが当たり前だと感じるようになってきた。世の中にはいろいろな仕事があるが，多くの職場でみんな同じような作業を繰り返している。来る日も，来る日も。それが仕事というものだ。

「楽しい仕事。やりがいのある仕事。希望に満ちた仕事。」

学生時代は，漠然（ばくぜん）とそんな夢を見ていた。しかし，現実は甘くない。仕事の厳しさも身にしみて分かった。「辛抱」も必要ではないかと思うようになった。それを乗り越えなければ，いくら「夢や希望」を語っても仕方ない。中学，高校と６年間続けた野球も，厳しい練習に耐えてはじめて，一勝という「目標」が達成できたのだ。

【C】この秋，一志は上司のＡさんから新作弁当づくりに参加するチャンスをもらった。行楽シーズンに売り出す弁当のおかずに，自分のアイデアを提案できるのだ。一志はこれまでの経験を生かして，調理方法や色合い，盛りつけだけでなく，栄養，仕入れ先，経費，衛生面など様々な条件を考慮した。気が付くと，献立づくりに夢中になっている自分がいた。この仕事が少しずつ好きになり，楽しさや誇りのようなものを感じ始めていた。

最終的に，食中毒を起こしにくい「漬け物」をアレンジしたおかずを考えた。

しかし，残念ながら一志の提案は採用されなかった。

結果を聞き，少しがっかりした。だが，その理由を聞く間もなく，すぐに会議室に呼ばれた。一志は不安になった。会議室に入ると，Ａさんはおだやかに語り始めた。

「現場で苦労した者のアイデアが活かされていて良かったぞ。これからも積極的にチャレンジしてくれよ。」

意外な言葉だった。そして次の瞬間，嬉しくて胸が熱くなった。自分のことを見てくれている先輩がいる。支えてくれる同僚や後輩もいる。この会社で自分が成長し，「新しい夢」が生まれてくる気がした。

一志は，この３年間の経験を通して「仕事を続けていくために大切なもの」が少しずつ分かりかけてきた。